

「中国古典」の豊饒なる原野へ

宇野 瑞木

シリーズ・キーワードで読む中国古典
四六判／法政大学出版社

中島隆博編 本体二二〇〇円＋税

コスモロギア 天化・時

廣瀬玲子編 本体二六〇〇円＋税

人ならぬもの 鬼・禽獣・石

志野好伸編 本体二六〇〇円＋税

聖と狂 聖人・真人・狂者

中国古典研究の現場から、『シリーズ・キーワードで読む中国古典』と題された魅力的なシリーズが誕生した。その名の通り、「中国古典」のさまざまなテクストから、キーワード別に原文と現代語訳を並置する形で紹介し、読解を試みるという斬新な切り口のシリーズである。全五巻の概要は、以下の通り。第一巻『コスモロギア——天・化・時』（中島隆博編）、第二巻『人ならぬもの——鬼・禽獣・石』（廣瀬玲子編）、第三巻『聖と狂——聖人・真人・狂者』（志野好伸編）、第四巻『あらわれのアルス——志・情・意』（齋藤希史編）、第五巻『治乱のヒストリア——夷狄・正統・勢』（伊東貴之編）。なお、第四、五巻は近刊予定である。

タイトルだけでも、従来の「中国古典」に関するシリーズと一線を画す企画であることは一目瞭然であろう。従来の現

代語訳で読める「中国古典」の叢書については第二巻の「余説」に委細が尽くされているが、要は、思想・歴史と文学を分けるもの、それら全てを含むものなど多様にあるけれども、いずれも書物、人物やセクト（学派・宗派）を軸に編まれており、かつ大部であった。これに対し、本シリーズは、キーワードを軸にテーマ別に編まれているため、既存の枠組みに制限されずに広く「中国古典」を見渡せるようになっていく。しかも、それが気軽に手にとれる分量で提供されていることが何よりも嬉しい。

そもそも、ここで言う「中国古典」とは何だろうか。二巻「余説」によれば、哲学・思想・歴史・文学といった広いジャンルにわたり、文言と白話の違いに捉われずに、「中国において文字で書かれたものすべてをおおい、ときには文字にさ

え限定されない概念としての「文」(二三八頁)ということになる。すなわち、「文」という「中国古典」の発生の場面にまで立ち戻って系譜的に問い直す試みなのである。この「中国古典」を動態的に捉え返そうとする姿勢は、従来の叢書におけるスタティックな在り方と鮮やかな対照をなす。そしてシリーズの生命ともいべきワード選出に関しても、「中国古典」に軸足を置きつつ東アジアのみならず欧米の研究まで視野に収めた編著者たちならではの、古典と現代とを切り結ぶユニークなものとなっているといえよう。

以下、紙面の都合上甚だ簡略ではあるが、既に刊行されている第三巻までの内容を概観したい。なお原則として、巻ごとに三つのキーワードを別々の著者が論述担当し、さらに編者が「総説」で各論を関連づけながら大きなテーマとして論じるという構成が貫かれている。

第一巻は、「天」「化」「時」をキーに、「コスモロジー」すなわち中国の宇宙論的想像力(コスモロジー)の可能性を問う。第一章(中島)では「天」概念の変遷を概観するが、その中で明らかにするのは、「天」が常に世界的秩序を揺るぎなく支えてきた訳ではない点である。「天」への懐疑は漢に萌し、唐の韓愈に至って鋭く示された。特筆すべきは、この「天」を再び世界的普遍性にまで押し上げようとする現代中国の動

向に言及している点で、他章とともに「古典」を近現代の問題系まで拡張した上で再考する意義深い論と言える。第二章「化」(本間次彦)では、『易』を中心とする儒教的文脈における世界の生成変化とそこに参与し得る人(聖人)が、様々に想定されてきた過程が概観され、さらに『莊子』の「物化」や道教、中国医学が拓く「気の沃野」にも言及する。第三章(林文孝)では、「時」が「時間の流れ」よりも「適切な時機」を指す点を示す一方で、我々が親しんでいる流れる時間観念は「道」と重なりつつも、そこに差異の要素を含まないことが確認される。また通説を覆す中国の終末論の可能性を論じた部分は、「ステレオタイプ的な中国文化像」(二八八頁)の消費回路からの脱却という本書の方向性を鮮やかに示してみせた好論である。「総説」では、以上から浮かび上がる人も含むダイナミックな宇宙論が、神が作りだした静的世界秩序に対して人間が持ち得る自由意志を問題とする西洋哲学の世界観と対置される。既にお気づきかとも思うが、キーワードごとに古典を引用する方法自体は「類書」の伝統に基づくものであり、その代表的な書(『太平御覧』等)を見ると、「天」に始まり「歳時」と続く。したがって「天」「時」の間に「化」を挟んだ意図を探ることこそ、本書の真の問いへの近道となるだろう。

第二巻は、上記のような宇宙論のダイナミズムに対し、人はどのように関係づけられ、定義されてきたのかを問う。その際、敢えて人「ならぬ」ものから人「なる」ものを炙り出すようにした逆転の発想に本書の魅惑の源泉がある。カギは「鬼」「禽獸」「石」の三つ。それぞれ原初的かつマージナルな場を表象し、自ずと従来の「古典」の枠組みから外れていく。第二章（廣瀬）の「鬼」とは、我が国でお馴染の桃太郎が退治した「オニ」ではなく「死者の霊」のことである。「鬼」は祖先祭祀と関わる重要な論点でありつつ、文学の源泉でもあり続けた。秩序を保つため敬遠され（孔子）、逆に生者の世を裏から秩序づけるものとして評価され（墨子）、無鬼論（王充）が唱えられたかと思えば、六朝志怪では大活躍と大忙しだ。ハイライトは著者の専門たる元明の戯曲を論じた箇所である。ト書きまで忠実に訳した現代語訳は劇場の臨場感を見事に伝える。「禽獸」を扱う第二章（本間）では、北宋において、動植物との差異化の中で、人が万物の内でも優れた存在として定義される過程を論じる。さらに禽獸を放逐し文明を保証する一方で、禽獸を親とする出生譚を持つなど、聖人の特異な立ち位置が浮き彫りにされていく。道教的文脈にそって論述された第三章「石」（土屋昌明）では、我々が「石」にもつ無機的なイメージに反し、「石」を生命を生み出す存在と見る。

また奇石がもつ内外反転の宇宙観（洞天思想）に言及した箇所は、著者が実際に洞窟に足を踏み入れた実体験に基づき説得力がある。以上、第二巻は扱う対象自体が、劇の脚本や道教の聖地など従来の「古典」から逸脱する。その中で炙り出されたのは、人全般よりも、むしろその頂点に位置する聖人のマージナルな性格であったようだ。

第三巻では、まさにその「聖人」も含む「真人」「狂者」という特殊な人が儒仏道の交叉する文脈において改めて問われる。第一章「聖人」（内山直樹）は、漢を中心に前後の時代の聖人観を概観する。「聖」は「耳ざとい」という基本義を持ち、その特殊な能力で天地を観察し文明を創造する。また「聖人」が異形の人として表象され、時に未知の事態に対処するために法を超えさえる点は、現代の価値観と隔たりがあるが故に逆にアクチュアルな問いを孕んでいよう。第二章「真人」（土屋）では、儒教の「聖人」の伝統を借りつつ神仙を取り込みながら「真人」像を作った『莊子』、その実践者・始皇帝の刻石、漢の緯書、六朝の道教経典や仏教を概観しながら文字の問題を考察する。第三章「狂者」（廖肇亨・志野）では、精神異常を指す「狂」は、『論語』では「周困から孤絶しながら理想を語る人物」として評価され、以後魯迅『狂人日記』まで脈々と続く、社会に対し異議申し立てをする者

の系譜を、文学（詩）、仏教とりわけ禪、知識人へと繋いできたことを確認した。「総説」では、西洋哲学における「神」が前提とされなかった伝統中国において諸価値に権威を与えた、人の内で並外れ、コスモスと関わる「聖人」「真人」、そして社会通念から外れた存在である「狂者」の儒仏道にまたがる複雑な関係を時代ごとに通観する。

以上三巻分を概観したが、期せずしてか「中国古典」の想像力の中でもとりわけ超越的でマージナルな次元が浮き彫りにされている観も否めない。一方で、特別でない人が置き去りになっている観も否めない。しかし続く第四巻では、人の内面に関わるキーワードが並んでおり、さらに第五巻では、「文」の領域の外側を扱うので、シリーズ全体でバランスがとれるのだろう。

本シリーズは、先述のように、従来の「古典」の枠組みをそれぞれのフィールドから問い直す試みといえる。第二巻「余説」では、本シリーズの狙いを、「これらのテキストをきつかけとして、読者のまえに時間と場所にとらわれることのないテキストの沃野が開かれること」にあり、それは「古典」の時代や「中国」という地域にとどまるものではな「いとも宣言されるのである。ここには、もう一つの「中国古典」の「沃野」が構想されている。それは、従来の「古典」の範疇から

はみ出る「文」も含みつつ、現代へと還流させていくことができる「豊饒さ」を秘めた「原野」に他ならない。

このような「古典」の系譜の問い直し、批評的な再読の運動は、他のジャンルへも波及し得る問題提起であろう。例えば、評者の専門である日本文学研究において見られる漢文学の再評価と古典の再構築の現場においても、漢文学の系譜やそれとの向き合い方自体の問い直しを促すはずである。一方、グローバル化の影で、再びかつての国文学の枠内へと安んじていくような動きが生まれつつある現状を思う時、本シリーズの意義は一層身に迫る。

無論、この「中国」は、西洋の眼差しの中の「中国」に対峙するものとしての意味も含んでいるし、現代中国における「古典」復興の動きと対峙するという意味もあるはずである。

いずれにしても、私たちに問われているのは、「古典」からいかにその「豊饒さ」を汲み取るか、ということではないか。その「豊饒さ」は決して人を選ばないはずだ。もし机上の一冊を前に、友人と膝を交え、コーヒーを啜りながら、「時」や「石」や「聖人」についてざっくばらんに語り合うならば、そこに「古典」は脈動し始めるだろう。そのような場を生む力が本シリーズには確かに込められている。

（うの・みずき 東京大学東洋文化研究所）